

# 「いのちの大切さ」「人を思いやるころ」を

～ 東村山市教育委員会「いのちの教育」推進プランから考える ～

青少年の問題行動や犯罪、地域や家庭の教育力の低下が社会問題と言われる昨今。マスメディアは「子どもたちが荒れている」「キレる子どもたち」等と報じ、多くの大人たちは、今の子どもたちは何を考えているのかわからない、と少しおびえながらも、「いのちの大切さ」「人を思いやるころ」を何とか形にして伝えたいと思っているのではないのでしょうか。

## ■ 中高生によるホームレス傷害致死事件の衝撃

東村山市は北多摩に位置し、近年の大規模住宅団地の開発によって住宅都市として人口が増加し、現在の人口は14万人を越える近郊都市です。市内には15の小学校と7つの中学校、5つの公民館と5つの図書館があります。

その東村山市で、平成14年1月25日、市内の中学生・高校生による傷害致死事件が起き、一人のホームレスの男性が亡くなりました。市立図書館での素行を注意されたという理由で、市内の公園で被害者のホームレスに執拗に暴行をはたらき死に至らせたという事件でした。

この事件に市内の青少年の健全育成に関わってきた大人たちはみな大きなショックを受けました。直後に発行された「きょういく東村山(特集号)」には、“この厳しく辛い現実から目をそらすことなく”かけがえのない生命の尊さと真に人を思いやる心の大切さとを、次代を担う子どもたちの一人一人に、ゆるぎないものとして培うことが最優先”子どもにだけ責任を押し付けることはできない。結局は、これだけ病んでいる社会の中で、大人たちが一人一人の子どもにどれだけ食い込んだ指導をしているかが問題である”などの、教育関係者としての反省と痛恨の思いが寄せられています。

一方、同世代の子どもたちも事件に大きなショックを受けました。中学2年のある子どもは、事件の後、作文に次のように書いているそうです。

『…この記事を読んだとき、思わず私は、「この中学生の気持ちわからなくもないなあ」と呟いていた。それを聞いた妹が私に不思議そうな顔で「今何て言ったの」と聞いた。私は慌てて「何でもない何でもない」とごまかした。加害者である中学生の気持ちが分かることが、自分で怖くなったからだ。…』

東村山市のホームレスの数は都心よりは少なく、日常生活での接点はそれほど多くはないと思われませんが、加害者の少年たちはホームレスをどのように見ていたの

でしょうか。他人の生命をどのくらい大切に思っていたでしょうか。多発するホームレスへの襲撃やいじめなど、子どもたちの問題行動のねっこには、「生命を大切に思う気持ち」や「他人への思いやり」などの人権感覚が薄れているということがあるのではないのでしょうか。

## ■ 「いのちの教育」推進プラン

事件後、市教育委員会は「いのちの教育」推進プラン策定協議会を立ち上げました。学校関係者、PTAなど保護者、地域の社会教育団体の代表、それに公募で参加した市民など30人が集まり、学校・家庭・地域の3つの部会にわかれて、それぞれの場面で、子どもたちのためにできること、やらなくてはいけないことは何なのかを話し合いました。そして報告としてまとめ、その年の夏、永久保存版として発行した広報誌でこう呼びかけています。

『是非、この報告書を、家庭では、夫婦や親子の話題として地域では、自治会、各種団体の会議などで学校では、職員会議、保護者会、PTAの会議などで行政では、各所管の施策や会議などで取り上げていただき、そこから「いのちの大切さ」と「人を思いやるころ」を培う「いのちの教育」にかかわる具体的な行動を起こしていただきたいと思います。』

(きょういく東村山第32号・臨時号)

報告書は、子育てや教育において問題だと思うことや疑問を感じることを率直に、具体的に問いかけます。『流し台の三角コーナーに死んでしまった熱帯魚を捨てたという母親の話を聞いたことがあります』『午後10時、11時まで子どもが外にいます。塾だということで安心していませんか』『「ありがとう」「ごめんなさい」と言わせるような基本的なしつけをしていますか』等々。そしてそれを読む大人たちに、日常生活の中での子どもとのかかわりを見直し、具体的な行動を起こすよう、具体的な視点をもって提案しています。

